

入院患者からみた医療情報とその距離

—図書館員の患者体験—

平川裕子

千葉県立衛生短期大学

1、はじめに

突然患者となってから、緊急入院で約数ヶ月、そこはかつての勤務先。病気になったら、万全に調べてとっていたのに、現実は全く違った。医療系図書館や公共図書館等で働いた点を踏まえても、医学図書館の持つ機能を、患者やその家族が知ったならば、必ずや利用したいであろう。そのためには館種・設置母体の異なる図書館の交流やネットワークの形成が必要となるが。

2、インフォームドコンセント

病院では使わない言葉、もっといい日本語はないものか

3、セカンドオピニオンで命拾い

4、看護師の役割の大切さ

5、必要な情報；プロが使う道具を患者にも公開。知ってこそ選べる

(1) データベースの無料公開

(2) 患者の使える場所に；

(3) やっぱり読んでよかった闘病記；出会いの賜物。

6、図書館の役割、

(1) 図書館は遠い存在

(2) 医学文献コンシェルジェ；館を出よう（の気持ち）

(3) 患者図書館

キーワードは人。欲しい人に欲しい情報を（データベースの検索結果など）

7、患者の状況；主治医とコミュニケーションをうまく取れるかが、最大の問題

8、おわりに

突然患者になって、治療を選ぶ際、希薄なデータで運命を決める厳しさを味わった。これからの患者は、病気の事を勉強して行かなければ、自分の欲しい医療にたどり付け無いのではないかと危惧する。また、医療界も国民が知ってか知らずか、自己責任の時代にむかっている。

それなのに医学文献を取り巻く状況は、患者にやさしいとはいえない。医学・病院図書館の果たす役割はますます重要になっている。

患者の欲しいものをもっている医療系図書館にいる皆さんは、患者から質問や要望がでたのを知ったとき、出きる限り少しでも叶えてあげる努力をしていただければ、患者としても、同業者としても、嬉しい。（ドクターや看護師のうしろには、常に患者がいるのですが）